

唐津焼⑥唐津焼の製法

～唐津焼はどうやって作る？～

◎地図・写真・統計資料など

唐津焼を作るには、まず粘土がいりますが、適度に粘りがあり、また高い温度で焼成しても形がくずれず、焼き上がったときに硬く丈夫になるものでなければなりません。昔の陶工は各地で良い原料を探しあて、それぞれの地区で特徴のある焼き物を作りました。

古唐津の作品は土の表情が実に多様です。現在は専門の製土業者が土を作っていますが、自分で土作りをする陶芸家もいます。

成形は主にロクロを使います。叩きの技法を用いて水指や壺を作ることもありますが、たくさん作るにはロクロの方が向いています。

成形した素地は現在では素焼きをしますが、江戸時代は生乾きの素地に絵付けをしました。鉄絵の具で文様を描きますが、少し太い筆で伸びやかに描くのが絵唐津の特徴です。

絵付けの次は施釉です。絵唐津の場合は透明釉を掛けますが、文様を描かない場合は、白い藁灰釉や黒い鉄釉などを掛けます。

焼成は1,250度前後の高温で行います。現在はガス窯が多いですが、昔ながらに登窯を使っている窯元もあります。登窯では松などの火力の強い薪を使います。窯の中では薪の燃えた灰が焼き物に掛かり、また炎の変化で焼き物に微妙な変化を与えます。焼成の時間は窯の大きさや作品によっても異なりますが、短い場合は十数時間、登窯の場合は一昼夜から数日炊くこともあります。



唐津焼の伝統技法「ろくろ」の行程

(唐津フォトライブラリーより)

◎引用・参考文献(出典)

◆『唐津焼の研究』中里逢庵著
2004年 河出書房新社

◎エピソード・伝承・うんちく など

- 登窯で焼いた唐津焼は時々思わぬ色や肌合いに仕上がるときがあり、こうした変化を期待して登窯による焼成にこだわる陶芸家が多くいます。
- 登窯は薪で焚くため煙が激しく出ます。昔は人家の近くで焚いていましたが、近年では人里離れたところに窯を築くようになりました。人家の近くであっても煙を焼失させるような装置を付けて焚く窯もあります。
- 唐津焼のような陶器は少しいびつだったり、素地が荒れていてもかえって味わい深い魅力とすることがあります。

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html